

2. 高山祭の屋台行事にみる歴史的風致

(1) 高山祭について

①はじめに

高山祭は、毎年4月14日、15日に行われる春の山王祭と、10月9日、10日に行われる秋の八幡祭の総称であり、江戸時代の初め頃を起源として今に続く。日本三大美祭の一つに数えられるこの祭りでは、山王祭12台、八幡祭11台の絢爛豪華な祭屋台が曳き揃えられ、見物する人々を魅了する。

高山祭の屋台行事は、江戸時代の地割や伝統的な町並みが今も残る旧高山城下町を舞台に、屋台を守り続ける屋台組の人々の

強い思いと誇りによって執り行われる。また、屋台の修理は、熟練の職人たちのひだのたくみ飛騨匠を原点とする高度な伝統技術によって行われる。さらに、屋台組のコミュニティは、日々の生活や歴史的な町並みの保存活動などと密接に結びついており、地域固有の伝統文化と人々の活動が脈々と受け継がれている。



旧城下町の町並みを曳かれる屋台

②高山祭の起源と変遷

高山祭の起源がいつかということとは、はっきりわからない。しかし、飛騨の最初にして最後の領国大名であった金森氏が、天正14年(1586)に飛騨に入国して、元禄5年(1692)に転封するまでの間であったことは間違いない。

高山祭の文献上の初見は、元禄5年(1692)に、その40年前の山王祭について記したものである。板坂平内より加賀藩士の永井織部に宛てた書簡に、「3年1度3月時分山王祭御座候」と記し、「右私家来野崎弥兵衛、40ヶ年以前五、六年飛騨高山に罷在候付、口上覚書如此御座候」とある。元禄5年より40年以前といえは承応元年(1652)で、将軍は徳川4代家綱、高山城主は金森4代頼直の時代であった。このころ既に3年に一度、山王祭があったことがわかるのである。

また、屋台についての記録は、享保3年(1718)に高山陣屋の地役人、上村木曾右衛門が書いた「高山八幡祭礼行列」が最も古い。それによると、このころ4台の屋台があったことがわかる。その他、元禄(1688～1704)の頃、二之新町の風井屋長右衛門が、胴切りの四ツ車に二階建ての屋形を仕組み、風井屋の紋所を染めた幕を張り、上部に大太鼓をつけて八幡祭の神楽囃子の社中に寄進したのが始まりだという口伝もあることから、屋台の起源は、元禄元年(1688)から享保3年(1718)までの間でないかと推察される。高山祭の屋台の形式は、江戸の天下祭と呼ばれる山王祭、神田祭のそれを模して発達したも

のといわれている。これは、元禄 5 年(1692)に飛騨が天領になって、江戸の文化が奔流のように流れ込んできたためであり、高山の屋台が上段を伸縮する仕掛けにしたのも江戸形の伝承といわれる。また、屋台を飾る織物や金具類は京都より求めているので、東西両文化の影響を受けているといえる。

以来、高山祭は屋台を中心にして発展していくが、この屋台を支えてきたのが屋台組の存在である。その前身は、金森時代から存在したと思われる町組である。元禄年代(1688～1704)には高山代官所による町人支配の行政単位としての役割を担っていたことが確認される町組であるが、高山祭の発展とともに祭り結びつき、やがて町組ごとに屋台を所有するようになって、「屋台組」と通称されるようになった。そして、それぞれの屋台組は競って改修や加飾を屋台に施し、その美と巧緻こうちを追求していったのである。

享保から天明年代(1716～1789)には、多くの屋台にからくり人形が取り入れられ、これにより屋台は単層から重層へと変わり、文化・文政の頃(1804～1830)には爛熟期を迎え、高山形ともいえる独特の形をつくり出した。また、現在の屋台に見られる見事な彫刻は、文化・文政の頃には取り付けられていなかったが、天保 8 年(1837)に信州諏訪の名工・立川和四郎の彫刻が山王祭の屋台「五台山」ごだいさんに取り付けられたことに刺激され、以後、谷口与鹿よろくなど高山の名工による彫刻が取り付けられることになる。

度々の大火による焼失や廃台によりいくつかの屋台を失いながらも、こうして高山祭と屋台は、屋台組を中心とする民衆の心意気により発展を続けてきた。

昭和 35 年(1960)、現存する 23 台の高山祭屋台は国の重要有形民俗文化財に指定された。また、昭和 43 年(1968)からは、高山祭の開催日が春秋とも現在の日程に改められ、昭和 54 年(1979)には、高山祭の屋台行事が国の重要無形民俗文化財に指定された。

さらに、平成 28 年(2016)には高山祭の屋台行事が、全国の 32 件の祭りとともに「山・鉾・屋台行事」としてユネスコ無形文化遺産に登録され、これにより高山祭が世界の財産であると認められたのである。

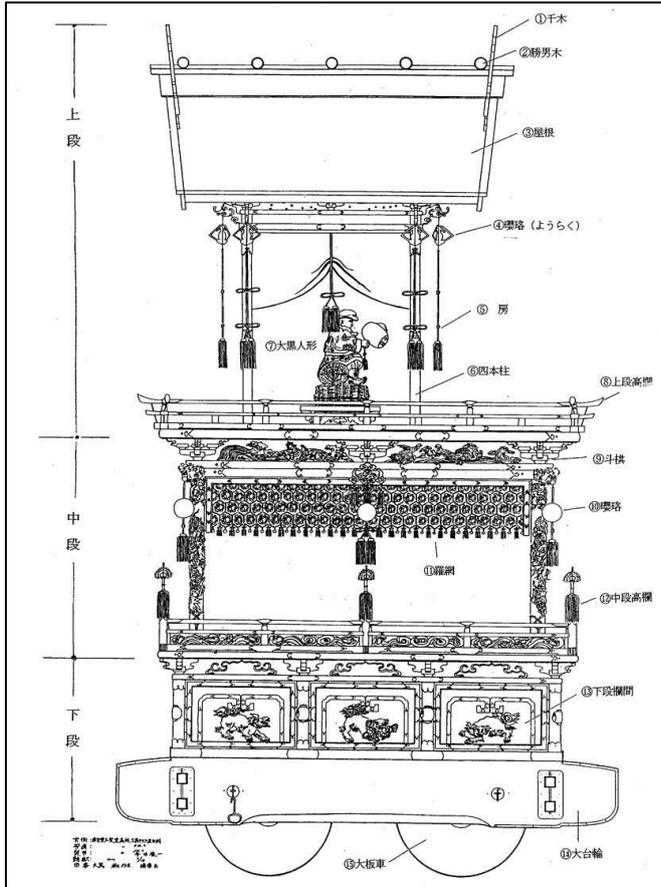
山王祭屋台絵巻（文化年間のものと推定）



三番叟(左)と神楽台(右)



龍神台のからくり



大國台の側面実測図



鳳凰台の唐獅子彫刻(谷口与鹿作)



豊明台の装飾



崑岡台



鳳凰台

③屋台を造った人たち

金森時代における高山の城下町づくりによって財産を築いた富裕な町人たちが、いわゆる「旦那衆」^{だんなしゅう}は、持てる財力を建物の造作に注ぎ込んで、高山独特の豪壮な町家建築を造り上げたが、己の資産や所得を増やすだけでなく、社会への還元にも意を用いた。それは、災害時における炊き出しや、公共事業への拠出等が挙げられるが、とりわけ、祭りの屋台の建造には惜しげもなく巨費を投じた。

それでは、富裕な町民の財力のみで屋台が造られたのかという点を決してそうではない。十数人から二十数人の有志が資金を出し合って屋台を造ったり、あるいは借財してでも屋台を再建したりしてきた。これらのことは、昔、「出し合い」という言葉が使われたことからわかるし、古文書にも数多くの記録が見つかっている。

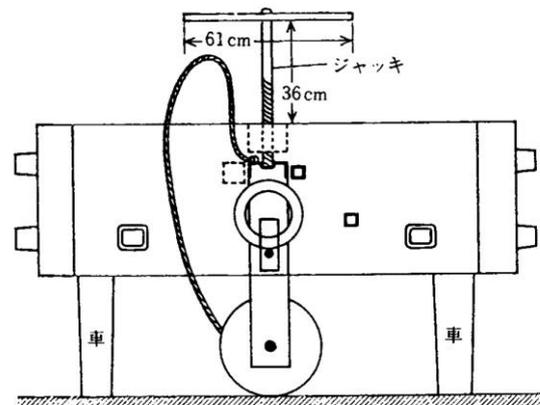
一方、飛騨人の伝統の技である、木工と彫刻と漆塗に見せる飛騨匠の腕の冴えが、屋台という好対象を得て、欲得を離れた名人気質でもって遺憾なく発揮された。高山の町人たちの財力と、飛騨匠の秀でた技、それに飛騨人の祭りに対する心意気と、元来持っている美術的素養とが融合し、さらに京の文化、江戸の文化の直情的な受け入れによって、恵まれた自然美の中で高山の屋台は生まれ、優雅に華麗に格調高く造り上げられたのである。

また、高山の屋台の発展の過程の中で注目に値することは、祭りの夢を追って、競って大改造を試み、大改修を手掛け、彫刻を添加し、補飾加飾を度重ねて、美と巧緻を追求してきたことである。したがって、高山の屋台のどの一つ、どの部分を見ても、決して同じものがない。しかも、競って他の屋台と構造・装飾が異なるように造り上げたにもかかわらず、高山の屋台の持つ型からはみ出さないで個々の美しさだけではなく、並べて見ての美しさも失わなかったことは特筆すべきものと言える。さらには、屋台の方向転換を容易にするための第五の車輪「戻し車」を付けるという、他に例のない方法も考え出された。

こうして先人たちが造り上げてきた高山祭の屋台は、山王祭 12 台、八幡祭 11 台の合計 23 台が現存しており、それぞれの屋台組が大事に守り続けている。屋台を造り上げ、今もその屋台を動かしている飛騨人の心意気と、厚い信仰心に支えられたやさしい心根が、絢爛豪華と見える屋台のその奥にあるのである。



戻し車(前輪を持ち上げ方向転換する)



戻し車の構造

(2) 高山祭に関連する建造物

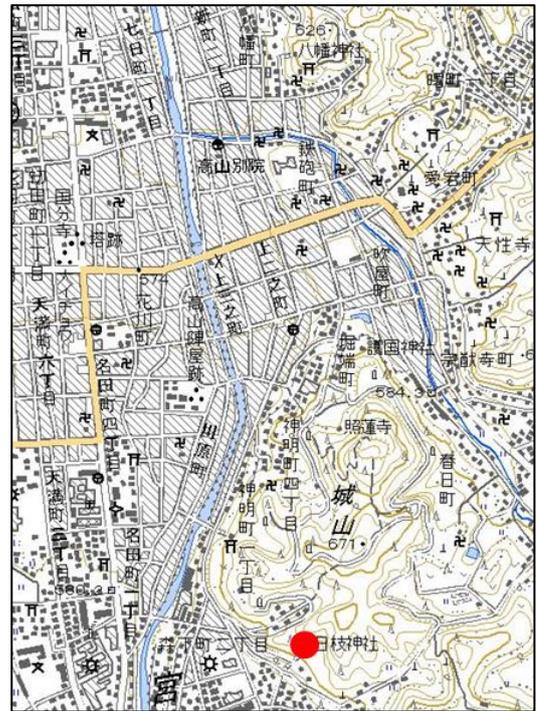
①日枝神社

山王祭の神社で、高山市城山に所在する。氏子範囲は旧城下町の南側である。金森氏が高山城を築城するにあたり鎮護神とした神社で、2棟の建造物が市指定文化財となっている。

社伝によれば、平安時代末期、三仏寺城主であった飛騨守平時輔朝臣が、永治元年(1141)のある日、狩に出て老猿に会い、これを追跡したところ片野山中に至り神威を感じたため、さっそく片野の石光山に城砦の鎮護神として、近江より日吉大神を勧請したのがその始まりとされる。

その後、天正13年(1585)に金森長近が飛騨に入国し、国内統一を果たして国主に封ぜられた。そこで築城にあたり、金森氏が代々守護神として崇めていた日吉大神を、片野より現在の地へ奉遷して、これを高山城の鎮護神とした。金森氏の転封後は幕府直轄地となったが、歴代代官及び郡代の尊崇が厚く、祈願所として度々社殿の修築や参詣等を怠らなかった。

市の文化財に指定されている建造物は、拝殿と富士社社殿の2棟である。拝殿は安永8年(1779)に建てられ、三方に縁がついた寄棟造りで、建物の前方に一間の向拝がある。屋根の中央に鋳屋根といわれる大きな段があり、大変珍しい建物である。富士社社殿は、元々は本殿として寛延元年(1748)に飛騨の名工・松田太右衛門が建造したものであったが、昭和10年(1935)の豪雨により裏山が崩れて本殿が倒壊したため、破損箇所を修理して昭和13年(1938)に末社殿として移築したものである。流造りに千鳥破風、軒破風を取り入れた屋敷形態をもち、極彩色が施されているのも珍しい。



日枝神社位置図



日枝神社拝殿



富士社社殿

②櫻山八幡宮

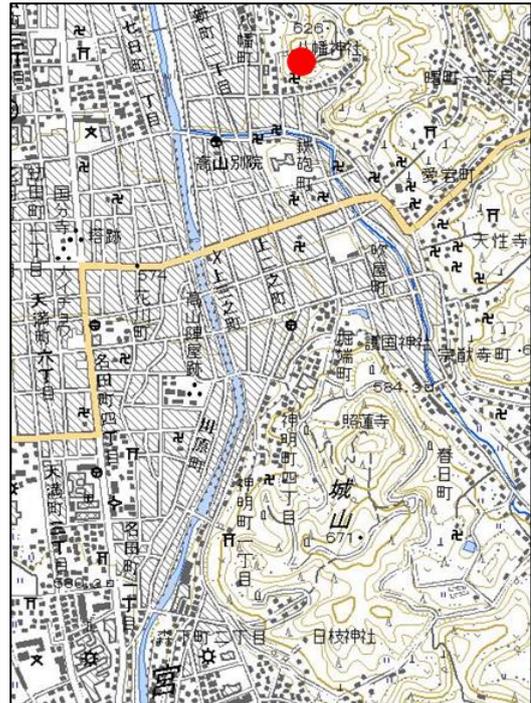
高山市桜町に所在。八幡祭の神社として、祭礼の中心的役割を果たす神社である。

社伝によれば、仁徳天皇の時代、飛騨国に両面宿儺すくなという凶賊が現れ、猛威をふるって人民を脅かしたので、大和朝廷から征討将軍に任命された武振熊命たけふるくまのみことが官軍を率いて飛騨の国に入り、この桜山の地で先帝応神天皇の尊霊を奉祀し、戦勝祈願をしたことに始まると伝えられている。その後、聖武天皇・清和天皇の時代に諸国に八幡宮が祀られたが、飛騨ではこの祈願をした場所を八幡宮境内として定め、社殿が整えられたという。

室町時代の大永年間(1521～28)、京都の石清水八幡宮を勧請し、その後は戦乱が相続き荒廃したこともあったが、元和9年(1623)、高山の領主金森重頼は、弟左京重勝の邸宅新築にあたり、江名子川の付け換え工事をしていたところ、旧川原から御神像を発見したため、八幡宮旧跡の桜山老杉の傍らに、応神天皇の御神体として奉安した。そして、神領を寄進し社殿を再興して居城北面の守護神とし、高山府の総鎮守社とした。飛騨が幕府直轄地となってからも、地域住民をはじめ、代官・郡代の厚い崇敬をあつめて、隆盛の一途をたどった。

享保14年(1729)、明治8年(1875)には大火により類焼したが、その都度速やかに復興された。大正13年(1924)には大改築がなされ、昭和51年(1976)から55年(1980)にかけて社殿、社務所等が新築されて今日に至っている。

境内南側の高台に鎮座する末社、秋葉神社社殿は、安永7年(1778)に建立されたもので、80段の石段とともに市の文化財に指定されている。高山市内の秋葉神社社殿の中で最も規模の大きいものの一つであり、社殿全体の形もよく、虹梁の絵様や木鼻などの意匠にも優れている。火防鎮護の神として崇敬されてきた神社で、明治8年の大火の際も火災をまぬがれている。



櫻山八幡宮位置図



櫻山八幡宮社殿



秋葉神社社殿

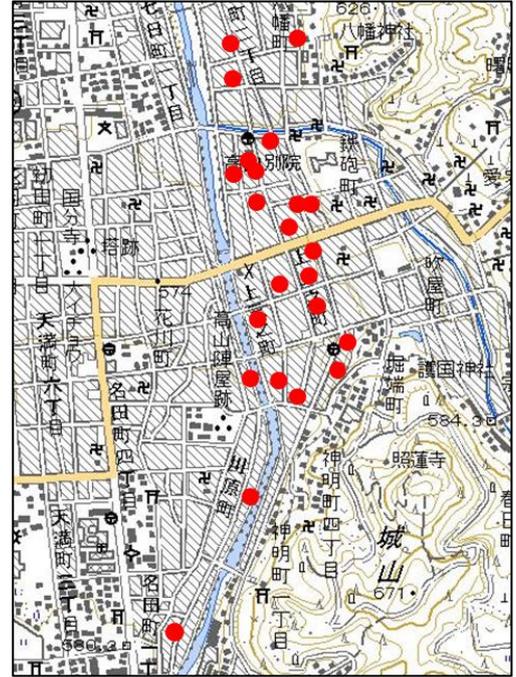
③屋台蔵

旧城下町を歩いていると、所々で通常よりも軒の高い白壁の土蔵を見かける。これは民家の土蔵ではなくて、屋台を格納する屋台蔵である。

屋台蔵で最古のものは、文化12年(1815)創建の龍神台のものであるといわれている。屋台蔵創建の最大の動機となったのは、大火による焼失である。それまでは、祭りが終わると屋台は解体され、各戸において保管されていた。そのため、度重なる大火により山王祭、八幡祭とも数台を失っており、復興されていない屋台もある。天保3年(1833)の大火後、弘化・安政の頃から明治末期にかけて、次々と新しい屋台蔵が建てられた。

屋台蔵は、大切な屋台を火災から守るという重要な役割を持つとともに、そこは屋台組にとっての祭りの中心的施設である。祭りの前には屋台蔵で屋台やわい(準備)が行われ、夜祭り終了後には蔵の前で宴が催される。屋台蔵の中には、正面上段に祭神が祀られており、屋台のほか関係古文献・諸道具などが納められている。

屋台蔵の構造を見ると、頂部が肩すばまりの四方転びになっているために、充実した安定感を見せているが、なかでも観音開きになっている扉には、誰もが感嘆の声を惜しまない。平均して一つの扉の幅は1.3m、高さ6m、壁の厚さ30cmである。これを3つの蝶番のみで支えていて、狂いが生じていない。これは高山に住んだ大工、左官、黒鋳(土工)、鍛冶等工人の総合技術によって完成したものである。高山を訪れた多くの文化人たちが、「屋台の見事さもさることながら、この屋台蔵はそれにもまして素晴らしい」と激賞しているように、屋台蔵は高山のシンボルの一つである。



屋台蔵位置図



屋台蔵(恵比須台)



屋台蔵での屋台やわい(準備)



屋台蔵の前での宴

(3) 高山祭を守り続ける人々の活動

①高山祭の概要

ア 山王祭の流れ

春の高山祭である山王祭は、旧城下町の南半分を氏子区域の中心とする日枝神社の例大祭であり、毎年4月14日、15日の両日に行われる。氏子区域には三町伝統的建造物群保存地区があり、歴史ある町並みの中を屋台が曳かれる。

行事は、祭礼当日の屋台の曳行順を決める3月1日の抽籤祭ちゆうせんさいから始まる。祭礼初日の14日は試楽祭といい、午前8時から神前において獅子舞・鬨鶏楽を奉納した後、午前9時から神社で祭典が行われる。祭典では神楽舞と倭舞が奉納される。午後になって神輿ごじゆんこに神様を御分霊し、総勢約300名の祭り行列「御巡幸」が出発。先頭は大櫛で、獅子・社名旗・台名旗(屋台の代わりの旗を立てた台車)・鬨鶏楽・太々神楽などが続き、一文字笠に裃姿の警固の人たちに守られた神輿が氏子の繁栄を願い、家々を巡行する。御旅所に到着すると着御祭が執行され、ここで神輿は一泊する。

12台の屋台は午前から各組の屋台蔵から曳き出され、「大八くずし」などの屋台囃子を奏しながら移動し、御旅所前と神明町の所定の場所に曳き揃える。夕方になると屋台に提灯が付けられ、午後6時から「夜祭」よまつりが行われる。神楽台を先頭に抽選順に町並みを曳行した後、曳き別れ歌「高い山」を歌いながら屋台蔵に帰る。

15日は本楽祭で、12台の屋台は午前から御旅所前・本町通り・さんまち通りの所定の場所に曳き揃えられる。御巡幸は午後から、発御祭の執行後に御旅所を出発し、氏子区域を巡行した後、神社へと帰っていく。神社へ着くと還御祭を行い、千秋楽、引払で祭礼の幕を閉じる。

これらの祭りを主催する人は「宮本」と呼ばれ、屋台組が順番に持ち回る。また、山王祭では、三番叟さんばそう、龍神台りゆうじんたい、石橋台しゃっきょうたいの3台の屋台でからくりが奉納される。からくり奉納は14日、15日とも午前と午後の2回、御旅所前で行われる。

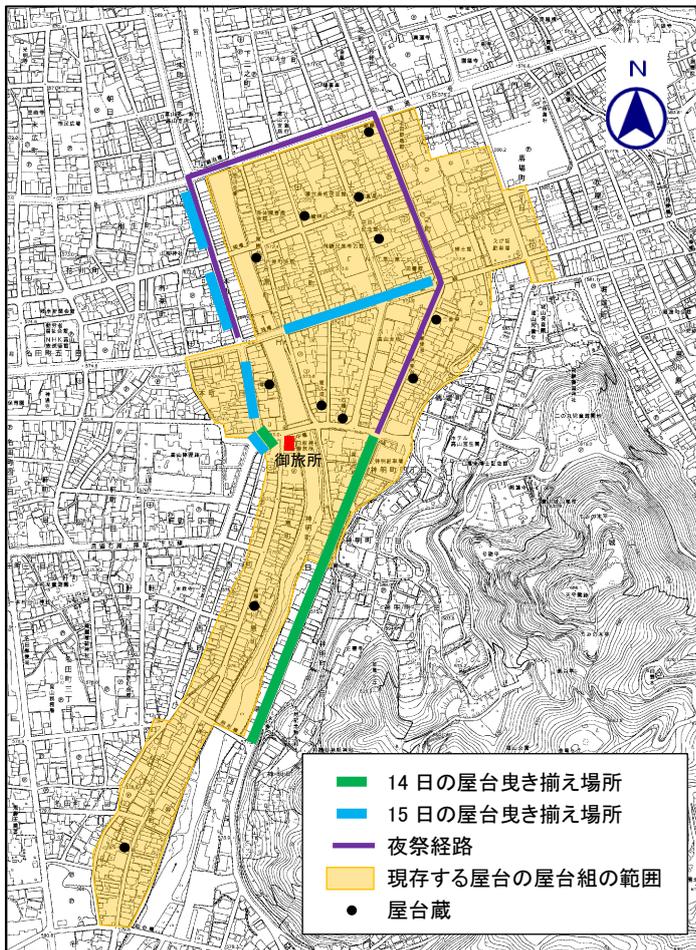
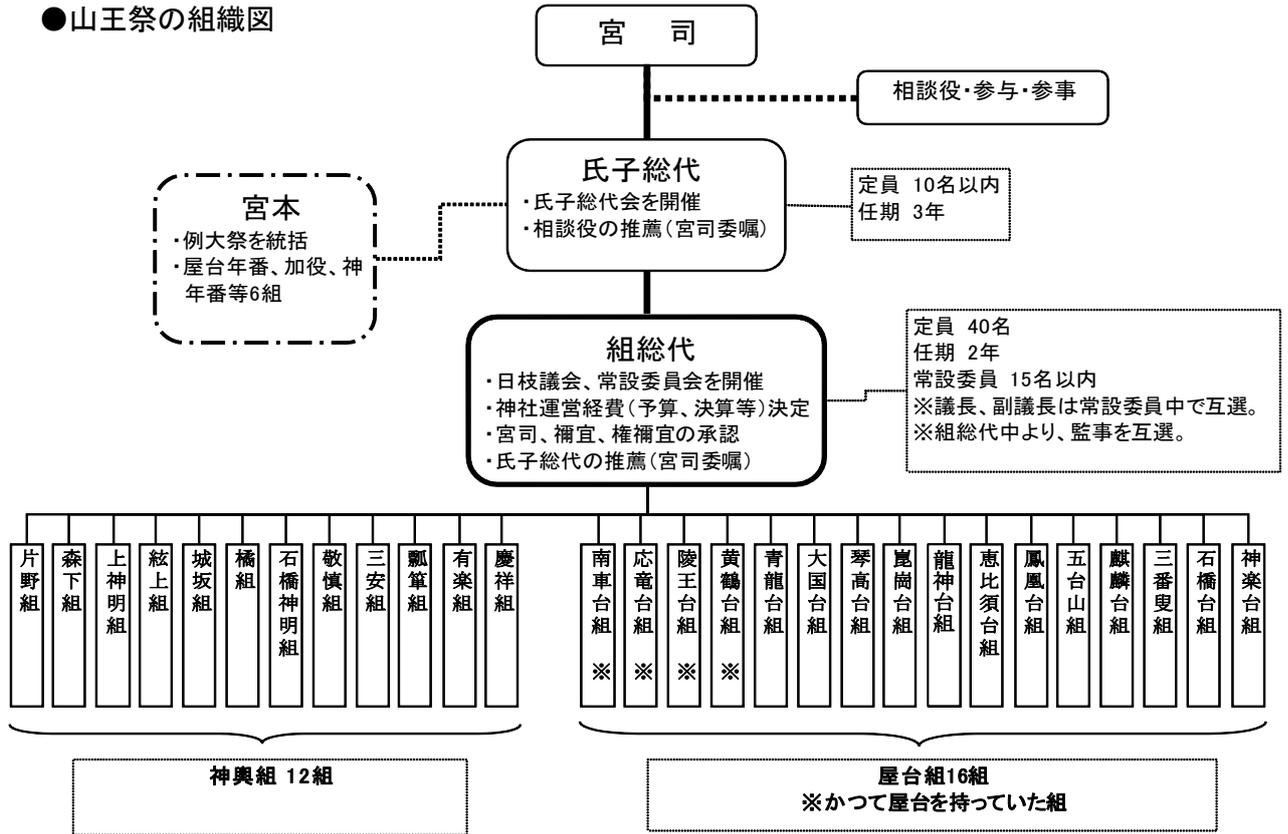


曳き揃え場所に移動する恵比須台



三番叟のからくり奉納

●山王祭の組織図



日枝神社の御旅所



御旅所前での獅子舞

イ 八幡祭の流れ

秋の高山祭である八幡祭は、旧城下町の北半分を氏子区域の中心とする櫻山八幡宮の例祭であり、毎年10月9日、10日の両日に行われる。氏子区域には下二之町大新町伝統的建造物群保存地区があり、伝統的な町並みの中を屋台が曳かれる。

八幡祭では、10月7日の夜に試楽祭と屋台順番抽籤祭ちゅうせんさいがあり、櫻山の舞と浦安の舞が奉納された後、屋台曳き揃え等の順番を決める。例祭初日の9日は午前10時から神社にて祭典が行われ、櫻山の舞と浦安の舞が奉納される。

午後から御分霊奉還、神幸祭の後、祭り行列「御神幸」ごしんこうが八幡宮を出発して、雅楽の調べとともに時代絵巻のような数百名の大行列が町を練り歩き氏子区域を巡行する。



御神幸

11台の屋台のうち10台は9日、10日も表参道に曳き揃えられ、神社境内では八幡祭で唯一である布袋台ほていたいのからくりが、両日とも午前と午後の2回奉納される。

9日の昼には「下廻り」しもまわといって4台の屋台が八幡宮北側の大新町を曳き廻される。この下廻りは山王祭にはない行事であり、高山祭屋台独特のしなやかな動きの美しさが青空の下で堪能できる。また、9日の夕方には各屋台に提灯が付けられ、午後6時から11台の屋台が闇夜の町並みを一巡。八幡祭ではこれを「宵祭」よいまつりという。そして、曳き別れ歌「高い山」を歌いながら各屋台蔵に帰っていく。

御神幸は、10日午前に再び八幡宮を出発し、氏子区域を巡りながら正午頃に御旅所に到着。御旅所祭を行った後、午後から御旅所を出発し、残りの氏子区域を巡行して夕方に八幡宮へ帰っていく。神社に着くと還御祭を行い、引払で祭りは終わりを迎える。

なお、例祭行事の総指揮は、山王祭では宮本であるが、八幡祭は年行司と呼ばれる。

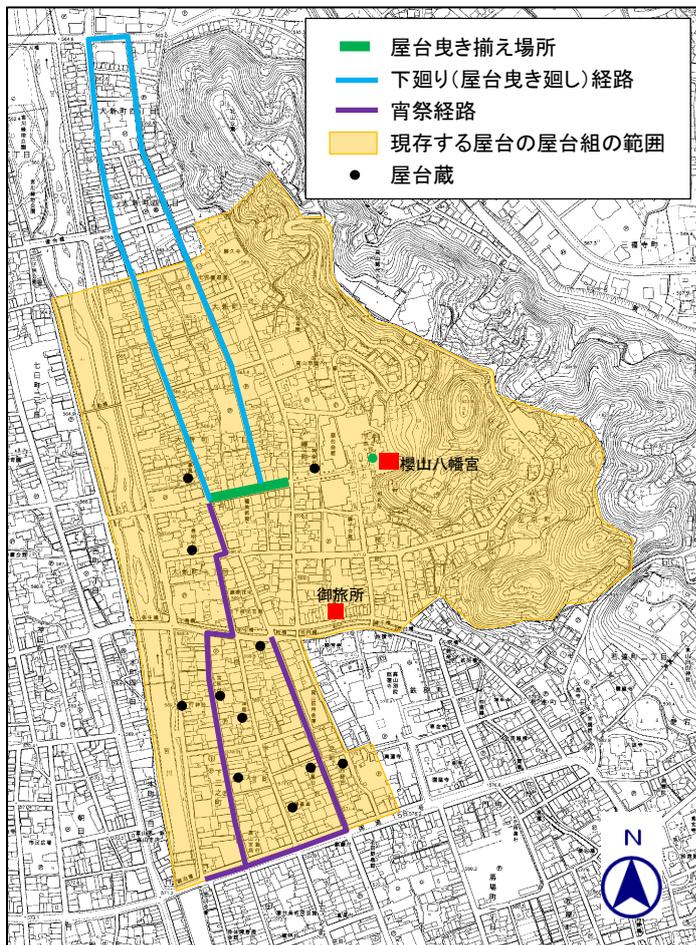
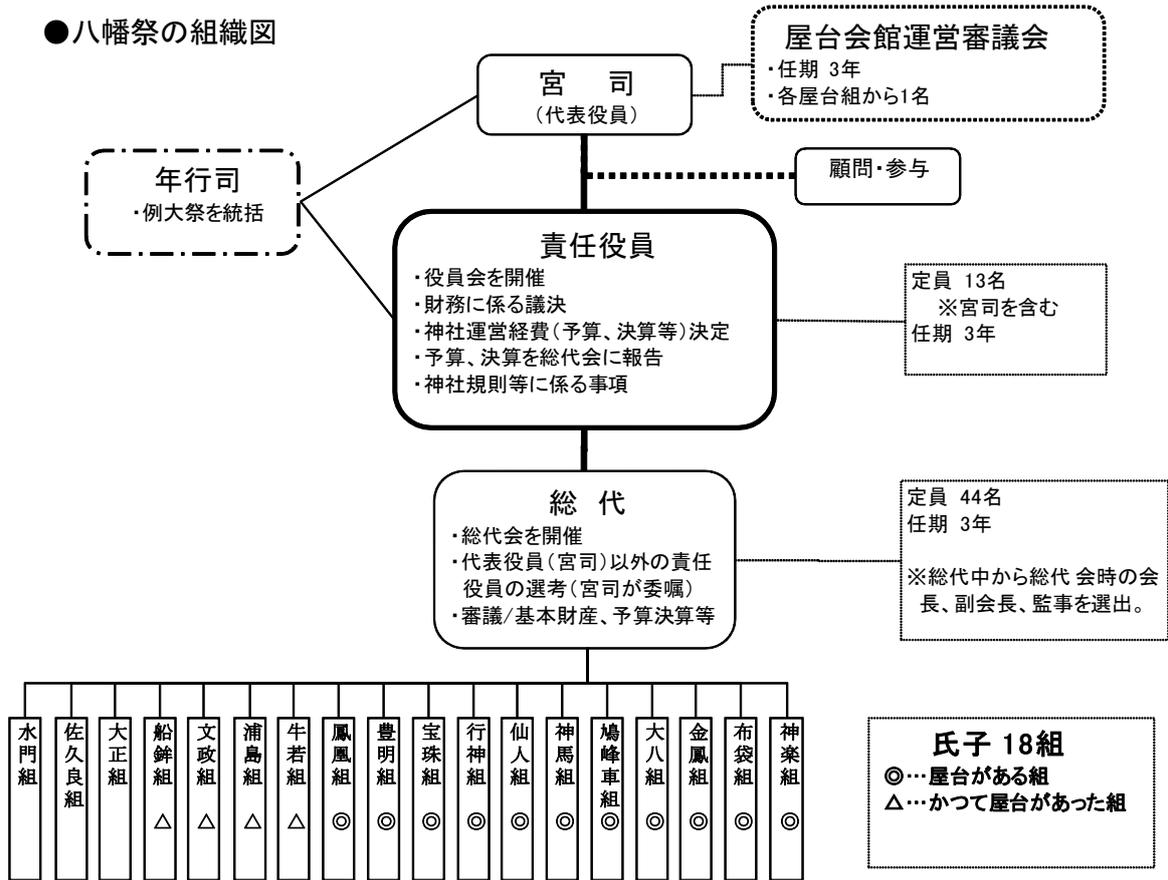


屋台曳き揃え



下廻り(屋台曳き廻し)

●八幡祭の組織図



櫻山八幡宮の御旅所



屋台の前での屋台囃子の演奏

ウ 祭り行列（御巡幸・御神幸）

祭り行列は氏子の繁栄を願い、神様が1泊2日の旅をするもので、御旅所が宿所である。これを、山王祭では御巡幸、八幡祭では御神幸という。神様は御分霊により神輿に乗り、総勢数百人もの大行列を組んで氏子区域を巡り、2日目には神社へ帰っていく。神社に帰ることを還御かんぎょという。神様の行列はたいへん華やかなものに仕立てられ、神輿を中心に獅子とうけいらく、鬨とりのけ、雅楽、袴姿の警護など、伝統の装束を身にまとった人たちが時代絵巻を織りなす。江戸時代から明治時代頃までは各屋台が行列に加わり、行列を賑やかにしていたが、町並みに電柱が建てられた頃から屋台が巡行しにくくなり、屋台の代わりに各組から屋台組の旗を立てた台車たいめい「台名旗」が行列に参加している。



屋台の代わりに台名旗

獅子舞は徳兵衛獅子とも呼ばれて、飛騨に伝わる多くの獅子舞のなかでも伝統的なものである。深緑に朱色で獅子頭の毛を模様化した油単をかぶり、静動織り交ぜながらの曲技を演ずる。鬨とりのけは鳥毛打ともいい、一般には打ち鳴らされる音を基にして「カンカコカン」の俗称で呼ばれている。一文字笠に龍と鳳凰を染め抜いた特異な衣装を身に着け、鉦と締太鼓を打ちながら行進する。

氏子の人たちは、行列がまわってくるのをそれぞれの家の玄関先で待ち、神輿の神様を迎える。御巡幸・御神幸の、高所からの見下ろし及び参拝は固く禁じられている。また、祭りの日には氏子区域の各家の前に、簾すだれや紋付の横幕をかけることが推奨されるが、これは神様がお通りになる際、家の中の汚れたものをお見せしないという、敬虔な伝統である。



八幡祭当日の町並み

祭り行列には、警護役として一文字笠に家紋の入った袴姿の役の人たちが参加する。一式何十万円もする高価なものであるが、氏子区域の各家では祭りに奉仕するため、昔から貧富を問わず袴だけは持っている。年に一度の晴れの舞台に袴を着用した組内の人たちが行例に参加するのは、幕府直轄地時代以降の地役人層と町人層との融合の表れである。文化年間の高山祭絵巻にも袴姿の人たちが描かれており、江戸時代からの伝統文化を継承し続けている。

厳粛のなかに華麗があり、絢爛のなかに荘重がある祭り行列は、屋台とともに高山祭の見所の一つである。

●祭り行列の様子



神輿



獅子



闘鶏楽



雅楽



巫女



袴姿の警護

●山王祭屋台絵巻に描かれた祭り行列（文化年間のものと推定）



エ 夜祭・宵祭

祭礼初日の夕方になると、各屋台には約百個もの提灯が付けられ、夜祭・宵祭の準備をする。時間になると、神楽台を一台目にして決められた順番により屋台が夜の町並みを巡行する。沿線では灯りが消され、提灯の灯りに浮かび上がる屋台が幽玄の美を醸し出し、昼間の絢爛とはまた違った魅力を見せる。途中、道の交差点数箇所、先頭を行く獅子が獅子舞をする。獅子は悪霊退散、祭礼場の祓えの役割を持つ。

屋台が順道場に至ると、曳き別れ歌「高い山」の調べとともに各屋台蔵に帰っていき、哀愁とともに一日目の祭りが終わりを迎える。



夜祭の屋台(山王祭)



宵祭の獅子舞(八幡祭)

オ 当番飾り

享保年間以前は、御巡幸や御神幸に関係なく、神社から各屋台組へ御分霊を招いて組ごとにお祭りを行っていた。その祭礼の場所に飾りつけをしたのが「当番飾り」の始まりである。御分霊の宿所が御旅所となってからも、この風習はその名残をとどめており、それぞれの屋台組の中の中心的効果がある場所(家)に組の宝を飾る。祭神は、屋台組の古いカラクリ人形、御幣、俵など本来の形のものから、組内で考案した飾り物を展示する組もある。



松本家住宅(国重要文化財)に飾られた当番飾り

当番飾りの設けられる家は毎年決まっており、道路に面した「ミセ」(道路側に開放できる広間)に飾られ、そこには献酒が多く集まる。その酒類は組内での宴に使用され、組内の結束に大きく寄与している。当番飾りは、町家の中の「ミセ」を使用しなければならない催事であり、当番飾りのために伝統的建造物を保存する程の力が入っている。また、各組内での競争心も存在する。

当番飾りは、町並みの中での伝統を反映した風習であり、伝統的な建造物群に精神性をもたらししている。

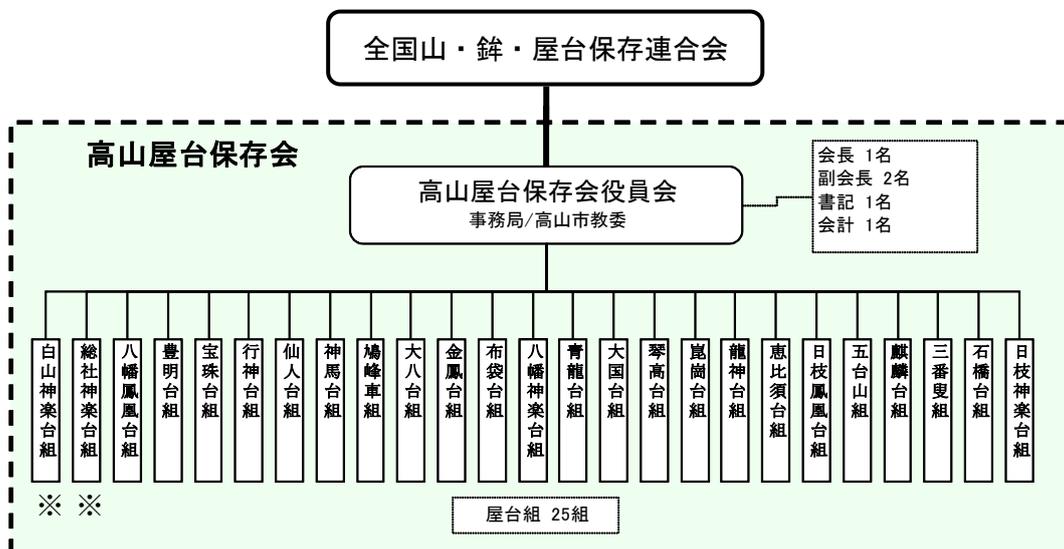
②屋台を守る屋台組の人々

江戸時代、町組ごとに屋台を所有するようになって屋台組ができ、屋台組の人たちが資金を出し合って屋台を維持し、高山祭の長い歴史をつくってきた。屋台組は町内自治会単位にあるわけではなく、それとは別個の存在で、町内に3組も屋台組があるかと思えば、数町内で一屋台組というところもあり、一口に屋台組といっても、その構成戸数が十戸前後のところから、二百数十戸の大きな組まである。また、中には焼失や廃台により現在は屋台を持っていない組もある。屋台組区域の住民を「組内」という。

小さな組では人員不足により、親類などの応援を得て屋台を曳いたりしているが、大きな組では複数の班に分け班単位の当番制をとっている。小さな組では役の当たらない家は一軒もないから大変であるし、大きな組になると数年に一回しか屋台に触れないという淋しさがあるが、いずれにしろ、屋台は組の宝物であり、誇りであって、大事にする心は皆変わらない。各屋台組には、それぞれ屋台について特に熱心な人が何人かおり、他の組の屋台に少しでもケチをつけたり、差し出がましいことを言ったりすると、こうした屋台好き同士でけんかとなってしまう。屋台組では、自分の組の屋台が一番いいと自慢しあい、「オゾクタイ(立派でない、だめな意)屋台」と笑われることが何よりも腹立たしいことである。

屋台組はそれぞれの区域が決まっており、その区域から転出すればどんな功労者であっても屋台に乗ったり、曳いたりする権利を失うことになる。その逆に、転入者は前住者と同様の権利を即持つことができるが、同時に屋台を守る義務も発生する。厳しく、かつ、寛大な定めが屋台組にはある。さらに屋台組のコミュニティを基盤として、日々の生活での助け合いや自分たちの住む歴史的な町並みの保存活動など、祭りの枠を超えた住民活動が伝統的に行われている。

昭和26年(1951)に、現存する屋台を持つ屋台組が参集し、高山屋台保存会を組織している。この会では、屋台保存や屋台囃子の後継者育成などの活動を行い、屋台の維持と屋台行事の継承の担い手育成の支えとなっている。また、全国組織に「全国山・鉾・屋台保存連合会」があり正会員となっている。



※5月5日を祭礼日とする東山白山神社、飛騨総社の屋台所有組織

③からくり技術の継承

文化・文政(1804～1830)の時代に高山祭の屋台にからくり人形が取り入れられ、江戸時代にはほとんどの屋台でからくりが演じられていたが、時代とともに失われ、現存して演技をしているのは4台となった。山王祭が三番叟、石橋台、龍神台、八幡祭は布袋台のみであるが、それぞれ伝統の操り技術を誇り高く今に受け継いでいる。

高山祭のからくりは、能の外題などを題材にした高度なもので、その内部機構は巧妙複雑であり、操作は極めて難しく長年にわたる修練と経験と勘が必要である。操作は組内の中から選ばれた操り手(布袋台では綾方あやかたという)により行われ、早い人は小学生から練習を積む。操り手をまとめるのは、その道40年、50年といったベテランで、修練を極めるための伝統的な人間関係の中で祭礼前の厳しい練習が行われる。



石橋台のからくり練習風景

操り手は組の中でも数人しか務めることができず、いわば花形である。また、からくりの練習には広いスペースが必要なため、組内の伝統的な町家の大きな部屋の中で行われている。



三番叟



石橋台



龍神台



布袋台

○三番叟

22条の糸を7人で操る。童形の三番叟人形が浦島の曲に合わせ機関樋の上を進むと、樋の先の聯合に置かれた鈴と扇子を手取る。次に面箱に顔を伏せると翁の面を被り、謡曲「翁」の仕舞を演ずる。

○石橋台

石橋物の長唄「英執着獅子はなぶさしゅうじやくじし」を取り入れたものである。濃艶な美女が舞っているうちに狂い獅子に変身し、その後再び元の姿に戻ると、両手に牡丹の花を持って千秋万歳と舞い納める。23条の糸を6人で操る。

○龍神台

31条の糸を5～6人で操って龍神の離れからくりが演じられる。長さ8尺余りの機関樋

を唐子が錦袋に包んだ壺を両手で抱きながら進み、先端の聯台に壺を据え舞いつつ引き返す。途中から急に駆け戻ると、壺の中から突然、壺の丈よりも二倍も大きな龍神が紙吹雪をあげて現れ、赤ら顔で荒々しく怒り舞う。

○布袋台

36 条もの糸を 8 人で操る極めて精緻巧妙なものである。「六段崩し」の曲に合わせ、男女 2 人の唐子が順番に 5 本の綾(ブランコ)を回転しながら飛びつたい、機関樋の先端で所作をしている布袋和尚の肩と手に乗って喜遊すると、布袋の左手の軍配の中から「和光同塵」と書いた幟が出てくる。

④屋台修理技術の継承

屋台の歴史は、修理の歴史でもある。屋台蔵ができる以前は、祭りが終わると屋台を分解し、分散して各戸の土蔵や納屋で保管をしていた。そのため、分解・組立によってホゾ部分の破損が多かった。また度々の大火により、一台まるごとでなくとも類焼した部品も多かったと想像できる。しかし、屋台蔵ができたからといって修理の必要がなくなったわけではなく、数十年を経て修理が行われている。これは、非分解式の収納になったことを機に、一層、堅牢性よりも美麗さに重点が置かれるようになり、繊細な骨組みと装飾の増加によって曳行による損傷が多くなったことが起因しているものと思われる。

現在の屋台の寿命は百回という。年一回の祭礼は 2 日間行われるので、年数にすると 50 年ということになる。構造全体の大修理は、概ね 50 年ごとを目安としており、それを超えた場合はどこかおかしいところをごまかしながら曳行することになるのである。それは、屋台組にとって極めて寂しいことであり、プライドが許さないことでもある。

屋台の修理は、江戸時代から現在まで、飛騨匠ひだのたくみの技を持つ名工や、伝統工芸の職人たちが請け負ってきた。他の組に負けない屋台を建造、改修するため、大工や鍛冶かざり、鋳金具、彫刻、漆塗などの職人が活躍してきたが、時代の流れによってこういった人材が減少し、職人確保が重要課題であった。

高山市と屋台保存会では、屋台を修理する優れた職人を確保して集団化しようと、昭和 56 年(1981)に「高山市屋台修理技術者認定要綱」を制定するとともに、「高山・祭屋台保存技術協同組合」を発足させた。認定基準に該当する者を技術者として認定することで、認定者に屋台修理に対する誇りを持ってもらうとともに、若手の見習者には、技術者としての認定を目標として取り組んでもらうことを目的としている。

現在、技術者として認定されている者は、木工 7 人、漆箔 3 人、鋳金具 2 人、彫刻 4 人、鍛冶 4 人の合計 20 人である。また、協同組合においては、木工、漆箔、鋳金具、彫刻、鍛冶、設



屋台修理職人(木工)

計の 6 分野に加え、平成 26 年(2014)には織物業者が新たに参加したことで、屋台の修理・復元の全工程 7 分野を全国で唯一、担うことができる技術者集団となった。組合員数は現在 23 人を数え、高山の屋台のみならず、全国の山、鉾、屋台などの修理も請け負っている。

屋台修理にあたっては、江戸、明治、大正それぞれの時代において職人が腕を振るって、現代の職人は当時の技術の高さにただ驚かされる。また、所有者である屋台組も、屋台の質を落としてはいけないと、高度な技術を要望する。そして職人たちは、技術者としての誇りに高揚し、また、屋台組もそれを支えていくという、良い関係を保持しながら屋台修理は進められ



彫刻極彩色の修復(塗り直し後)

ている。飛騨匠の技が今も生きる技術集団として腕を振るい、そして屋台組と共に歩みながら、高山祭の屋台行事の維持に貢献しているのである。

おおいたくるま
大板車(台輪)の制作工程



大板車の木取り



鉄輪を焼いて延ばす



輪締め(鉄輪を収縮させる)



カスガイ打ち(完成)

(4) 高山祭と一体をなす自然的環境（城山風致地区・北山風致地区）

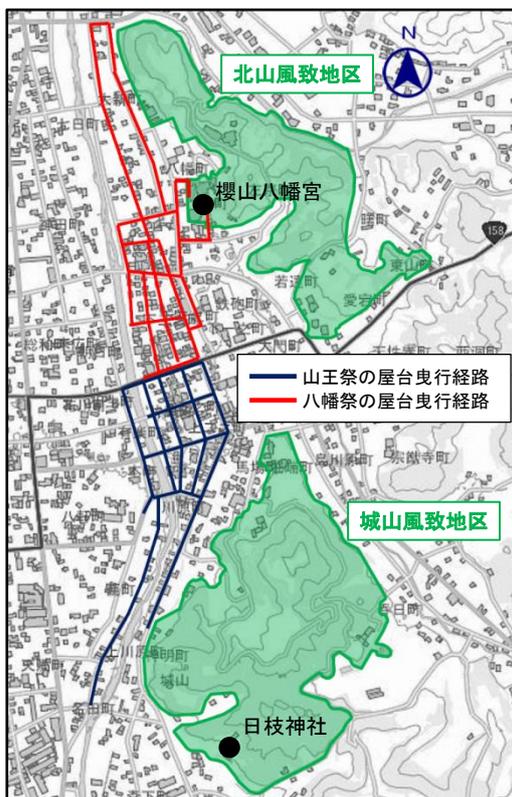
高山祭の氏神である日枝神社と櫻山八幡宮は、祭礼区域である旧城下町の東側に位置する二つの風致地区の中にそれぞれ佇んでいる。

山王祭の日枝神社が所在する城山風致地区は、かつて飛騨国主・金森長近が築いた高山城があった場所である。元禄5年(1692)に高山が天領となった後、幕府の命により城は完全に破却されたが、文化5年(1808)になると、この城跡に桜の木が植えられ、翌年には茶屋等ができ、以後、「城山^{しろやま}」は町民の憩いの場となっていた。昭和31年(1956)に風致地区に指定された城山は、公園や遊歩道が整備され、今も市民や観光客の憩いの場として親しまれている。

また、八幡祭の櫻山八幡宮が所在する北山風致地区は、旧城下町から眺望できる身近な里山であるとともに旧城下町の骨格をなし、歴史的景観を構成する重要な緑地として、平成5年(1993)に風致地区に指定され、その貴重な自然環境が保全されている。

それぞれの風致地区は、二つの神社の厳かな空間と融和するとともに、祭礼時には奉納される獅子舞の祭囃子や太鼓の音、鬨鶏楽の鐘の音が山々に響き渡る。また、祭屋台の曳き揃えや曳行の際、その背景に山王祭は城山、八幡祭は北山の山々の緑が連なり、朱色を主とした屋台の艶やかさを一層引き立てる。特に、春は芽吹きたての若葉とサクラの花が、秋は所々色付き始めた木々の紅葉が、美しく祭りを盛り立ててくれる。

二つの風致地区の豊かな自然環境は、その一部は二つの神社を囲む鎮守の森として、また全体の山並みは祭屋台を引き立てる背景として、古来より高山祭と融和しており、それらが一体をなして高山祭の屋台行事という本市固有の伝統と文化を形成している。



城山風致地区と北山風致地区



山王祭の屋台と背景の城山風致地区



八幡祭の屋台と背景の北山風致地区

(5) まとめ

江戸時代の初め頃に始まった高山祭は、旧城下町を舞台として、屋台を大事に守り続ける屋台組の人々や、屋台の修理を行う職人たちの心意気と厚い信仰心によって、絢爛豪華な23台の屋台とともに脈々と今に受け継がれている。

屋台組の活動の拠点である屋台蔵は、屋台行事のシンボリックな建物として旧城下町の各所に所在し、その周辺には江戸時代の面影を残す貴重な建造物が今も数多く保存されている。この祭礼の場は、一年に一度の晴れやかな祭り空間、屋台の曳かれる場所としてだけではなく、屋台組というコミュニティの中での、助け合いや共同作業、町並み保存活動など、祭りの枠を超えた人々の日常生活と深く一体となっており、屋台組の存在がこの地に伝統的な町並みが残されていることにも大きく貢献している。また、城山風致地区と北山風致地区は、それぞれ高山祭の氏神である日枝神社と櫻山八幡宮が鎮座するとともに、その山々が屋台曳き揃えなどの背景となることで、古来より高山祭と融和している。

高山祭の屋台行事の場である歴史的な町並みと自然的環境、そこで行われる屋台組を基盤とする伝統的な人々の活動が一体をなして、本市を代表する歴史的風致を形成している。

高山祭の屋台行事にみる歴史的風致の範囲

